

タフに生きたい

痛快ナースのアメリカ患者体験

樽井恵美子



医学書院

201464

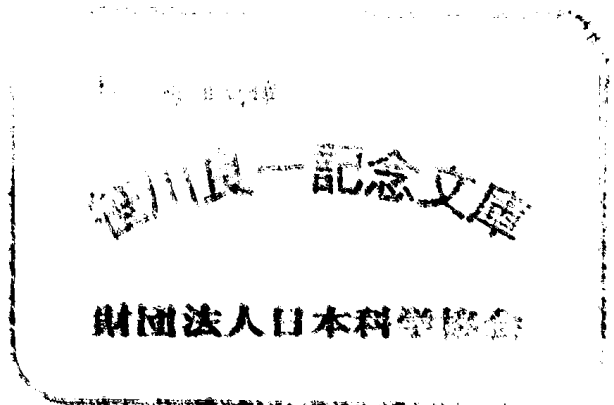
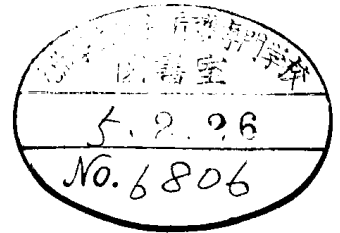


日文 701648799

タフに生きたい

痛快ナースのアメリカ患者体験

樽井恵美子



■著者紹介

昭和41年3月，日本赤十字女子短期大学卒業。同年4月，社会保険小倉記念病院就職。48年4月，日赤医療センター就職。同年11月より1年間，日赤幹部看護婦養成所で学ぶ。昭和52年8月，米国ミネソタ州立ダルース校 pre-nursing 入学。53年9月，ミネソタ州立ワイノナ大学入学。昭和55年8月，交通事故にて重傷を負う。11月，療養に専念するため帰国。昭和57年11月，車椅子の婦長として足立クリニック（北九州市）に就職。63年7月退職。平成元年1月，和白病院（福岡市）に就職。副看護部長を経て看護部長となり，平成3年8月退職。現在は，療養のかたわら小倉南看護専門学校で非常勤講師として勤務。

タフに生きたい——痛快ナースのアメリカ患者体験

1992年10月1日発行 第1版第1刷©

著者 樽井恵美子
たるい えみこ

発行者 株式会社 医学書院

代表取締役 金原 優

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3

電話 03-3817-5600（社内案内）

印刷 三美印刷

製本 信和製本

用紙 北越製紙

本書の内容を無断で複写・複製・転載すると，著作権・出版権の侵害となることがありますので，ご注意ください。

ISBN 4-260-34074-3 Y2200

序

著者は、アメリカ留学中に交通事故を体験した。それは、ワイオミング州にあるイエローストンの山奥で、日本から来た友人を助手席に乗せたまま、運転を誤って谷底に転落し九死に一生を得た体験である。本書は、そんな私の後輩の手記である。看護婦である彼女自身が、予想しなかった事故に直面して、ほぼメチャメチャにこわれた肉体とともに12年の間現在まで懸命に生きぬいた貴重な体験の記録である。

物語は、著者が、左右の肩甲骨骨折、肋骨3本骨折、骨盤左右多発性骨折、脾臓破裂、右上腕骨骨折、腰椎4・5脱臼骨折、左膝靱帯2本切断、右膝骨折、右第1趾骨骨折、右殿部切傷、その他……という病名がつくような重症を負ったその時に始まる。

本書は4部からなる。第1部は、受傷の時からヘリコプターで助けられ、アメリカの病院で生死の境をさまよい、危機を一応脱出するまでの記録である。アメリカの医療施設が、人間を救うためにいかに整えられているか、アメリカの医師やナースが人間を救うために、いかに専門職として充実した機能を果たしているか、その様子が鮮明に描かれている。また、自立心に

富んだアメリカの患者が、明るく病気に立ち向かっている姿など、アメリカ気質がみごとに書きつづられている。生死を境にする危機状態の著者が、自分自身と自分の周囲を冷静に観察できたことは、著者の豊かな感受性と専門性に裏うちされた強靱な意志の現われである。

第2部は、著者がアメリカ留学を決心するまでの時期にさかのぼり、その経過が記されている。

第3部は、著者が、アメリカ留学を一時断念して日本に帰国し、何回か手術を受けながら、日本において療養生活を送った時期を記している。日本の医療や身体障害者に対する社会全体の仕組みが、アメリカに比べて、いかに貧困な状態にあるか、受傷者自からの体験を対比させて記されており、読者にとっては実に考えさせられる1章である。特に、ナースたちが、専門職としての機能を十分に果たせないわが国の状況を鋭く指摘している。人をケアするとはどういうことなのか深く考えさせられる。

アメリカのナースたちは、対象となる受傷者たちをそのままの姿で受け止め、その人が自立していくためには、その人に何をどのようにサポートしたらよいのかを考えながら行動している。これに比べて、わが国では、大方、受傷者の感情は無視され、ナースはただ一方的に世話をおしつけるばかりで、その受傷者に生きる希望を失なわせる結果になっていることを、客観的に淡々と述べている。これは、看護の専門家が果たすべき役割すら整理されないまま、人手不足のため精魂尽き果てるまで働かされている日本の医療のあり方や看護教育制度の見直しを根本から考えさせられる迫力ある部分である。

第4部は、著者が、職場復帰を試みる物語である。不自由な身体を苦使して、懸命に挑戦する著者の姿が、痛いほど読者に伝わってくる。

重傷を背負ったため、危機にさらされながら、懸命に生きてきた著者は、本書の終わりに、「私は、なぜ生かされたのか。あの事故で九死に一生を得たのは、何をしろということだったのか、今もわからない。与えられた仕事にうち込んでいけば答えがわかるかもしれない。」「タフに生きなくては」と自問自答している。人間である以上、その一生の間に誰もが1回は考える人間が生きる究極の目的を追求する姿がある。

本書は、ハンディと苦痛を背負いながら、かけがえのない一生を懸命に生きぬいている人の貴重な体験の記録である。ここには、懸命に生きている人のいのちと、ほかの誰も代用することのできない著者自身の価値が輝いている。

恵美子さんには、これからもぜひ、専門家であり同時に受傷者である貴女の生きざまを記し続けてもらいたい。

本書の価値は、特に日本の医療行政にかかわる人々、医療実践にかかわる人々、また、これから医療に関する専門家になろうとする人々、あるいは一般の人々などに読まれてさらに高くなるであろうと確信する。

おわりに、この貴重な体験の記録に序文を書かせていただいたことを、友人として、先輩として、この上なく誇りに思う次第です。

1992年8月

樋口 康子

まえがき

看護婦としてもう一度勉強したいとアメリカ留学をして3年目、昭和55年8月、ロッキー山脈の山中で車ごと崖から落ちる事故を起こしました。九死に一生を得たアメリカ入院生活から始まって、それからは私の計画になかった体験を繰り返すことになりました。

『看護』の昭和58年4月号“かお”の欄で、「車椅子で元気に婦長業務をこなす」というタイトルで紹介され、その記事がきっかけで昭和63年東邦大学医療技術短期大学の戴帽式特別講演に招かれました。私のアメリカ留学、事故、入院生活、リハビリテーション、職場復帰の体験をとりとめもなくお話しさせていただいただけのことで、それほど特別なこととは思っていませんでした。ところが後日、300名の看護学生さんの感想文が送られて来たのです。意外な反響に驚きました。

私の体験をただの思い出にすべきではないと教えられたような気がしました。そして事故後8年経過していましたが、看護婦としての自分自身のためにも体験をまとめてみようと考え、平成元年に雑誌『ナースステーション』に4回連載させていただきました。

その後も看護学校や病院の講演に招かれて、体験談を話させていただきましたが、私自身の中には、単に私の体験を話すことがお役に立っているのだろうかというためらいがいつもありました。「あの連載の続きはいつ出るのですか?」「どうなったのですか?」という言葉聞きながらも、先へ進めなかったのですが、体験した者の話はリアルであり、参考になるという先輩の言葉に勇気を得て続きを書きあげることになりました。

看護婦として患者心理は理解していたつもりでしたが、実際に患者の立場になって、障害をもってみて、何もわかっていなかったことを知りました。職場復帰してからの私は、それを患者さんに代わって訴えたいと努めてきました。この体験記を発表することによって、より多くの医療に携わっている方々、現在勉強中の皆様に、また現に障害をもった方々に、少しでもお役に立てばうれしく思います。

アメリカ留学をするまでの経緯や、アメリカの生活などにも多少触れて紹介させていただきました。

当時の記憶を掘り起こし、あくまで一個の私という人間の主観を通してですが、事実のままと綴ってみました。評価は、読者の皆様に委ねることにいたします。

1992 年 8 月

著 者

目 次

序	樋口 康子	iii
まえがき		vi
 第1部 アメリカの入院生活		1
1. 留学中の交通事故		3
希望とともに出発したアメリカ横断旅行だったが	3	
見事なヘリコプターでの救出作戦	6	
COFFEE BREAK Flight Nurse	10	
2. You were dying yesterday		12
あくまで強気な患者	12	
「93歳まで生きる」という揺るぎない自信	13	
知らぬが勝ち	15	
COFFEE BREAK 虫の知らせ	17	
3. 看護婦をリードする重症患者		20
綿棒から吸った水のおいしさ	20	
お尻の痛さをとる方法	21	
前代未聞——吸引カテーテルを自分で操る重症患者	22	
COFFEE BREAK メイヨ・クリニック	24	
4. 設備がいいって本当にいいことだ		28
全身骨折に伴う強烈な痛さ	28	
恐怖のレントゲン写真撮影	29	
あら不思議！ 痛みが来ない	30	
ターンベッドのありがたさ	32	
まさに苦痛からの解放	34	

5. アメリカのドクター	35
診察台を包囲するドクターたちへの無言の抵抗	35
有名人になったような気分	37
1 回目の腰の手術	38
回診は明るさ届ける定期便	39
COFFEE BREAK レディーファースト	42
6. 涙の 3 日間	44
現実が見えてきた	44
7. アメリカのナース	46
痒いところに手が届くケア	46
ICU での快適読書生活	48
感じのいい “Thank you”	49
「散歩 1 日 1 回」の頑固なまでの徹底	50
嫌なナースは 1 人もいなかった	52
COFFEE BREAK Nursing-Program	53
8. おしゃれして入院生活を楽しむ患者	56
医療費は高いけれど、障害を社会生活の不利にはしない	56
フランスからプレゼントされたもの	57
片方だけ残ったピアスをぶら下げて	59
同室者シェリーとの素晴らしき連携プレイ	60
ロビーでの最後の夜	61
COFFEE BREAK アメリカの医療費	63
9. 初対面の見舞い客	66
ママが立ててくれた面会スケジュール	66
アメリカの “ママ” は日本人びいき	67
ギブスへの落書き——“I love you” “Get well soon”	68
寂しさの入り込むスキなんてなかった	70
クラスメイトの友情	71
友達のそのまた友達の両親までが	72

困っている人を助けるのはあたりまえ	73
面会者の絶えない異国での入院生活	74
10. 野菜のキャッチボール	76
魅力的な流動食メニュー	76
小さなボランティア	77
「お粥と梅干し」——日本人だったことを思い出す	78
COFFEE BREAK 日本食	81
11. やむなく帰国	84
退院後の復学を断念	84
アメリカのリハビリテーション	85
「必ず帰って来る」ことを信じて	86
楽しい思い出をありがとう	87
第2部 アメリカに行くまで	89
1. はみだし学生が目覚め	91
不純な動機で短大入学	91
3年生最後の小児病棟実習で	92
看護婦になってよかった	93
目標喪失の危機を脱し、看護への志を立てる	94
世の中、先はどうなるかわからない	95
胸を張って“I am a nurse!”と言ってみたい	95
「よし、絶対行く!」の決意が道を拓く	96
2. 守銭奴とドジな苦学生	98
使わなければお金は貯まる	98
「やるしかない!」の英会話	99
年下のクラスメイトの助け舟に感謝	101
行きたいなら行けばいいのに	102
いざアメリカへ	103

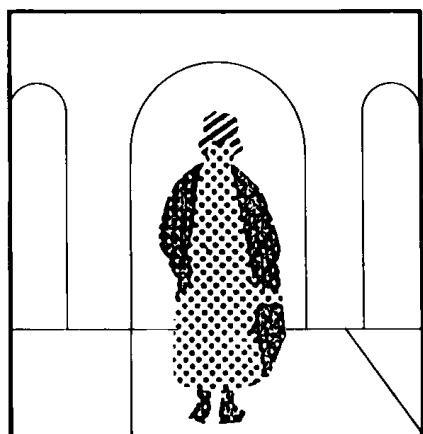
第3部 日本入院生活	105
1. 便利が悪いのもまたいいことだ	107
最前席を占領してなつかしの日本へ	107
日本には車椅子旅行者はいないのか？	108
腰を下ろしたら立てない家の中	111
畳の部屋と和式トイレの効用	112
不便な我が家をリハビリ道場に	113
COFFEE BREAK アメリカのクリスマス	115
2. 再手術	117
母よあなたは強かった	117
安心は痛みの良薬	118
自力で行動できる喜び	120
腰椎の再手術へ	121
2度目の生還	122
これからのことしか考えない	123
3. 看護婦が「白衣の天使」なわけ	124
予想外に苦しかった術後	124
落下滴数自主管理	125
恥ずかしいなんて気持ちさえなくなる	126
無謀であったとしても悔やんではない	127
食べられない人に食事を勧める要らぬ親切の罪	128
夜明けはまだか？——天使の第一声で始まる朝	129
COFFEE BREAK 素人	131
4. 患者も楽ではないのです	133
長い長い1週間	133
自由になれたのも束の間、再び絶対安静	134
看護婦のはきちがえたプライド	135
わかったつもりを深く反省	137

5. 車椅子で町へ買い物へ	138
リハビリテーション事始め	138
車椅子の暴走族	139
「ほどほどに」ということを教えられる	140
看護婦の私がやらないでだれがやる	142
6. 人間の体ってスゴイ	145
右側車線を走り出す	145
たくさんの不思議	146
東京の人込みと活気が好き	147
どんな装具も人の骨にはかなわない	148
急いてはことを仕損じる	149
装具の取りはずしには成功したものの	150
 第4部 職場復帰	 153
1. 車椅子の婦長	155
はじめは週2日の勤務から	155
雨ニモマケズ風ニモマケズ	156
足の神経が目覚めました	157
油断ならない婦長さん	158
靴を履いて歩く足の動きの研究	159
ビデオに映った我が姿を見て	161
ソーメンを食べて青春を語ろう	162
看護婦として育つ教育環境づくり	163
2. 6年ぶりのアメリカ	164
フグにひれ酒はこたえられない	164
なんとかなるさの女2人	165
アメリカのママと感激の再会	166
アメリカの分娩事情	168
かなわぬ夢とはわかっている	170

COFFEE BREAK 占い	171
3. 和服の正月	173
患者のそばに出て働ける充実感	173
エステティックサロンと整体	174
退職を決意する	176
眠っていただけの1か月	176
スペイン旅行で心の洗濯	177
6年間にけじめをつける送別会	178
4. 私はタフに生きられるだろうか	179
引越疲れでリウマチが起きるのだろうか	179
初めてのひどい落ち込み	180
患者とすぐ仲良くなる看護部長	181
高望みを戒める	182
ああ、3回目の骨折	183
私にこれから何ができる？ どうすればいい？	184
5. 人生これからだ	187
今は療養に専念するしかない	187
いっさいの薬を絶つ	188
患者のつらさが痛いほどわかる	189
看護婦の仕事の原点になければならないもの	190
ふさぎ込むのもよし、立ち直るまでなのだから	191
女は60歳からが花と信じて	192
あとがき	195

第1部

アメリカの入院生活



1

留学中の交通事故

●希望とともに出発したアメリカ横断旅行だったが

1980年8月28日、その日の我々のスケジュールは、午前中イエローストーン国立公園を軽く観光して、夕方にはサウスダコタ州に入り宿泊場所を探す予定だった。イエローストーンは観光に最低3日間にかかるほど広いのだが、先を急ぐ我々は、日本人独特の上っ面観光で満足することにしていた。東京から10日間の休暇を取って遊びに来た友人を愛車に乗せて、ロッキー山脈をカナダからアメリカへ下り、さらに私の住むミネソタ州までアメリカ横断を楽しむという計画だった。

9月6日からは待望のナーシングのクラスが始まる。その3年前、私は32歳だったが、日赤医療センターを退職して、ミネソタ州立大学1年生に入学した。苦学の結果やっとナーシング・クラスに合格して迎えた夏休み、私の心は希望にはずんでいた。アメリカの大学では、実習のユニホームは各人が準備する。デザインも自由に選べる。私はパンツスーツとワンピース型を揃えた。学生の私には既製品は高いので、パンツスーツは